
黒邪の啼哭（聖安戦記 外伝）

亜薇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒邪の啼哭（聖安戦記 外伝）

【Nコード】

N5325BA

【作者名】

亜薇

【あらすじ】

愛する者を奪われた時、慈悲深き神は恐るべき脅威へと変貌する――天帝の御子として生まれながら「この世を破滅に導く邪神になる」と予言された黒龍・鶴。しかしそんな宿命にもかかわらず、誰よりも純粹で美しい心を持つ優しい神に成長し、父母神や他の神々に疎まれながらも穏やかに暮らしていた。ある時兄の月とともに、魔物の襲撃や終わらぬ戦乱に苦しむ力弱き人間たちを救うため、自らの力を与えた神巫女たちを創造する。やがて鶴は、月の創造した「奈雷」に恋い焦がれるようになるが……？（主人公麗蘭の最大の

敵、黒龍の過去編。イメージイラストを何点か展示しています)

設定・登場人物紹介（前書き）

本編の敵、黒龍を主人公とした外伝です。

本編序章である「荒国に蘭」よりも数千年前の昔から、物語ははじまります。

外伝ですが本編からほとんど独立している話なので、本編を読んでいなくても支障ないと思われます。

設定・登場人物紹介

■ 鵄ぬえ《黒龍神》こくりゅうしん

天子でありながら『黒神』こくじんに為ると予言されたため、神々からも人間からも不吉とされ畏怖される。

人界を憂い、自らの力を与え神巫女『闇龍』やみりゅうを創る。

■ 月ゆえ《聖龍神》せいりゅうしん

鵄の双子の兄で、次代の天帝と定められた御子。

不遇な弟を思い、共に宿命に抗おうとする。

神巫女『光龍』こうりゅうを創る。

■ 琉羅るら《闇龍》やみりゅう

黒の神力を纏う神巫女で、鵄を主とする。

茗帝国の皇女として生まれ、皇帝である兄の補佐として政務を行っている。

■ 奈雷ならい《光龍》こうりゅう

白の神力を纏う神巫女で、月を主とする。

祥岐王国の貧しい農村に生まれ孤児となり、過酷な少女時代を過ごしてきた。

■ 翠すい《邪龍》じゃりゅう

天帝と女神新羅女しんらによの息子。

神格を奪われ、異形の姿に変えられた上、地上に追放された。

天帝と天妃、そして異母兄である月を憎んでいる。

序

遙か、神代

天に地に

禍神と呼ばれし鵜鳥の

響き渡るは「黒邪こくやの啼哭ていこく」



序

天地開闢かいびやくより数万年、天上界は天帝「神王しんおう」治世下。

天上の中心に聳そびえ立つ、神々が集う神王の居宮「陽凰宮ようおうきゅう」黎明殿れいめいでんの地下に、華やかな表の天界から隔離され陰に追いやられた、幼い神に与えられし「夜明宮やめいきゅう」が在った。

その宮の主は「黒龍神こくりゅうしん」、名を鵜ぬえ。神王の双子の天子の片割れだった。その神名に相応ふさわしい、黒い髪に黒い瞳を持つ見目麗しい御子だったという。

> i
3
9
0
8
5
—
4
8
4
8
<

序（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

「荒国に蘭」で敵として登場した黒龍の過去編になります。
心優しき神が「邪神」へと変貌する過程を描きます。

— 1 —
(前書き)

麗しの兄弟登場。

天宮の地下深くに位置する夜明宮。

此処は、天帝によって神々が立ち入ることを禁じられた区域だった。

宮の主である鵺ぬえと、その双子の兄である月ゆえを除いては――

「鵺。」

鵺は兄の呼び掛けに、読んでいた書物を机に置いて立ち上がった。

「兄さん、久し振り。」

向かい合った二人の少年の姿は、髪と双眸の色を除けばまるで鏡に映したかのように似ていた。

彼らは双神であり、天帝「神王」と天妃「神女しんにょ」の二人の天子。鵺を訪ねて来た兄は「聖龍神せいりゅうしん」、名を月といい、神王によって次の天帝と定められた銀の髪の御子である。

「また書物に耽っていたのか。この前来た時よりも増えているな。」
「まあ他にすることも無いからね。」

部屋を見回す兄に、鵺は苦笑して見せた。積み上げられた幾つもの書物の山が、決して広くはない部屋のあちこちにある。

「最後に兄さんが訪ねて来てくれた時から大分経ったけど…天帝陛下や天妃陛下はお変わらない？」

鵺は父や母を「陛下」と呼ぶ。兄のように「父上」「母上」と呼

ぶことを禁じられているから。

「…お変わらない。相変わらずだ。」

鵜は「大分時間が経った」と言ったが、月にとっては大した時間には思えなかった。月の記憶が間違っていなければ、確かまだほんの2、3年しか経っていないはずだ。

永遠の時を生きる神族にとっては、時等とるに足らぬもの。鵜のような感覚の持ち主は、彼らの中では希少であった。永き時を一人でこの天宮の地下に住むことを強いられた鵜だから、多少の感じ方の違いは致し方の無いことだ。

「来てくれてありがとうね、兄さん。さ、座って。」

鵜は嬉しそうに微笑んで兄に席を勧めた。釣られて普段は固い月の顔も綻び、短く礼を言って鵜の向いに腰を下ろす。

この兄弟は、姿形は見紛ってしまう程良く似ているが、性格や、雰囲気は似ても似付かなかった。月の方は常に冷静で、他人の前ではほとんど表情を崩さない。対して鵜は、表情が豊かで子供らしく、素直で純粋な神だった。

「まだ人界に降りたりしているのか？」

「うん、まあね。」

神が無闇に人界に降りるのは禁じられていた。鵜も初めは恐る恐る降りていたが、人間たちに干渉しなければとくにお咎めも無いようなので、寂しいこの宮を時々抜け出しては、人界に降りるようになっていた。

鵜は人界が好きだった。人間たちを、人界の空を、大地を、生き

物たちを愛していた。その点においても鵠はかなり珍しい神だったといえよう。人界は神界を崇め、隷属する存在。余程の物好きでなければ、神は人界に降りてみよう等ということを考えたりはしなかったのだ。

月は、そんな弟が好きだった。

「荒廃が至る所で目に付く。天災が、飢饉が、戦争が、溢れている。」

人界創世から数えてまだ数千年。天地の均衡はしっかりとしたものではなく、魔界からの魔物の侵入や、暮らしを脅かす天変地異も絶えないという。

鵠は俯いた。しかし、瞳は強固だった。

「僕、最近ずっと考えてるんだ。何か出来ることは無いかって…何か、彼らのためにしてあげたい。こんな僕にでも何かが出来るのなら…」

月は、鵠に分からぬようそつと溜息をついた。

鵠が案ずる人間たち以上に、不幸だったのは鵠自身の方だ。

双神として生まれた月と鵠は、引き裂かれて何百年間も一度も会うことなく別々の場所で過ごしていた。同じ天帝の息子でありながら、二人の境遇は全く異なっていた。

——片や次代の天帝、片や破滅を導く忌むべき子。

この世の理、天の王たる神王が、鵠を厭^{いと}うた。即ち、鵠がこの世

界でたった一人になってしまったことを意味する。

鵜が厭われた理由は、鵜と月が生まれ出づる時のたった一つの「さきのみ先見」にあった。

——生れ落ちる双神は、次なる天帝となるべき銀の皇子と、

神王陛下の御世を脅かす悪しき黒の皇子である。

「先見」の予見は絶対で、必ず実現するという。

しかし月は、鵜が他のどの神よりも優しく、その心の美しいことを知っていた。——そんな先見は、到底信じられなかった。

鵜の宮を出て、地上へ続く長い階段を独り上りながら、月は不遇な彼に何かしてやれないかと思った。しかし此れはいつものことで、良い方法が思い付いた試し等無い。月に出来ることと言えば、父の目を忍んで時折弟を訪ねてやること位なのだ。

鵜は人界に降りた。

訪れたのは、戦乱が続く国の、荒れ果てた村の一つ。

男は子供から老人に至るまで戦いに駆り出され、家畜は既に食べ尽くされて、残っていたのは女たちだけだった。

路上に生えた雑草を齧^{かじ}り、乾いた土を口にする少女たち。此処はまだましな方だ。鵜はいつだったか、女たちが自分の赤ん坊を焼き殺し平らげていた村に行ったこともある。

鵜は人間が好きだった。彼らを心底美しいと思っていた。短い生を、それぞれが精一杯生き抜いていたから。

けれどこのような村にいるのは、美しさを失ってしまった人間だった。鵜は、それが彼らの所為^{せい}ではないことを知っていた。

彼らが窮状にいるのは、天上で見て見ぬ振りをしながら胡坐^{あぐら}をかいて座っている神々の所為に他ならない。

確かに、戦争は人間が醜い欲望をぶつけ合って起きたものに違いない。だが神々にはそれを摘み取る力も、有り余る時間もあり、そうするべきだった。にも関わらずそれをしようとしなのは、人間たちをいつまでも天上界の下に置き、隷属させようという天帝の意思からだ。

天帝は、そもそも自分を崇める存在欲しさに人間を創造した。人々は天の絶対的な力に平伏し、天に救いを求める。しかし、天は何もしない。見ているだけだ。

鵜のように考えている神は、他にも多少はいたかもしれない。それでも何も事態が良くならないのは、天帝が「不必要」に人界に神が干渉するのを禁じていたからだ。

たとえ鵜が戦争で死んだこの女たちの夫や父、兄や弟を一人残らず生き返らせたとして、この戦争を進めている一部の人間を戒め止めさせたとして、無意味だろう。荒廃は既に人界中で目に付き、此れからも広がっていく。

ふと彼の目に、人気の無い道の真ん中でしゃがみこんでいる一人の少女がとまった。幼い少女は小さな黒い猫を撫でてやりながら頻りに泣いていた。猫は死んでしまっているようだ。

鵜は少女に近づき、しゃがんで優しく話し掛けた。

「かしてごらん。」

少女は涙を拭い、不思議そうに鵜を見てから、腕の中の猫を鵜に渡した。

彼はそれを受け取ると、猫の額に指を当てた。間もなく猫は再び息をし始め、金色の眼を開いた。

「生き返った!」

神族にとっては死んだ生き物に再び生命を与えるなど、造作もない。人間であっても、首が斬られているか、心臓が潰されているかでなければ生き返らせることが可能だ。

鵜から猫を渡されると、少女は驚きと喜びの声を上げた。撫でてやると、猫は擦ったように鳴いている。

嬉しそうな少女に、鵜は見入った。少女の輝きを取り戻した顔は正しく彼が見たかったもの。

後ろから少女を呼ぶ女性の声がして、彼は我に返った。そして自分の行いを後悔した。

少女は振り返って、猫を抱いたまま女性の元へ走っていく。目の前の黒い髪の少年が猫を生き返らせたと聞き、女性の顔はみるみるうちに真っ青になった。

「お赦下さい！」

女性は跪き、鵜に向かって頭を地に着けた。

「黒龍神さまとお見受けします。この子は…娘はまだ何も判らないのです。どうかお赦し下さいませ…」

きょとんとしている娘を庇うように、母親は懇願する。鵜は溜息をついた。そして少女に微笑んで、静かにその場を立ち去った。

村を出て更に歩くと、小さな神殿に行き着いた。人の気配がしないことに安心して中に入って行く。

「凄い…」

鵜は思わず感嘆した。神殿の中は思ったよりも広く、左右には高い天井へと伸びた白柱が立ち並び、奥へと続いている。柱の奥の壁は、一面が壁画で覆われていた。

長く続き過ぎている戦乱で、もはや神に縋ろうとする人々の姿すら無い。神官さえ居なくなってしまった神殿の寂しさが、却って一層荘厳さを醸し出しているかのようだ。

奥へ歩いて行くと、主神として祭られているのは天帝、神王。美しく威厳に満ちた巨大な石像は、鵜が知っている父とは似ても似付かなかった。

——自分たちが畏れ、敬愛する天帝が、実は己の享樂に耽り人間のことなど露程にも考えていない男であることを知ったら、彼らはどう思うのだろう。

鵜は父の石像に積もっていた埃を手で払いながら、苦笑した。

再び歩き出すと、彼は壁画を一つ一つ見て行った。

ほとんどが天帝や兄聖龍神のもので、魔物を討伐する闘神から天界でも有名な美神まで様々な神々が美しく描かれていたが、やはり鵜のものは無かった。在ったとしても、他の神のように輝かしい存在としては描かれてはいまい。

自分のものが無いことに寧ろ安堵しながら、彼は最後の絵の前に立った。その絵を見た途端、他の絵とは確かに違うものを感じた。

描かれていたのは山となって大地を埋め尽くす無数の屍、全てを焼き払うかのような真っ赤な焰、立ち込める黒い煙。そして、全て

の中心に立つのは黒い髪に黒い瞳の血塗れちまみの神。

彼は直ぐに気付いた。それが紛れもない自分自身だということに。

黒い髪に黒い瞳の神など、彼以外には存在しない。

それに、絵の中で彼にそっくりな聖龍神が、剣を抜いて彼に対していたのだから。

絵の右下には、小さな字で「非天と天子」、「黒神こくじんと銀神」とある。

その「鵄」は、ぞっとする程冷たい笑みを浮かべていた。

鵄は、後に此れが先見の予見であることを知る。

――生まれ落ちる双神は、次なる天帝となるべき銀の皇子と、神王陛下の御世を脅かす悪しき黒の皇子である。

自分が実の父母に忌み嫌われ、神々だけでなく、人間たちにも恐れられる理由であるこの先見の言には、続きが在った。

――互いに、殺し合うべき宿しよにあり。

あの神殿壁画こそが、鵄と月の予言された未来の姿だったのだ。

― 2 ― (後書き)

神が神殿に行き、像を見て「似てないな」と感じる。
こういうシチュエーションが好きです、何故か。

― 1 ―
(前書き)

鶴と月は成長し、青年になっています。
外見年齢18歳くらいの設定。

高く青く晴れ渡る空の下、双神たちは剣を交合させていた。
何千年かの時を経、彼らは青年の姿に成長していた。

「鵠、もっとどんどん打って来い！遠慮しなくて良いぞ！」

月は弟の剣を受けてやりながら言った。

「厳しいなあ、兄さんは…遠慮なんかしてないのに。」

鵠は笑って、月の隙を見つけようとする。

既に天界随一の剣の使い手となっていた月は、時折鵠を宮の外に連れ出して相手をしてやっていた。神王と神女の仲が更に陰悪になっていき、二人とも天宮を留守にすることが多くなったので可能になったことだ。

鵠は月とは違い、剣術をはじめ人から何も教わることが出来なかったので、兄の心遣いが本当に嬉しかった。そして、あの薄暗い宮から出られるように配慮してくれることにも感謝していた。

長くすらりと伸びた手足を駆使して、兄の剣を受け止め隙をついて攻めていく。重なり合う剣と剣の音が、晴天に響く。

「よしっ！」

兄が少し身を引いた瞬間、鵠が突きを繰り出した。狙いは兄に剣を落とさせること。

強めの突きを軽やかに避け、月がもらったとばかりに笑む。

「あ、しまった！」

気付いた時にはもう遅く、生まれた死角から反対に鶴が剣を落とされてしまった。

月の剣先が鶴の首筋に触れ、勝負はあった。

「参りました。…あーあ、また負けちゃったよ…」

少し悔しそうな顔をする鶴に微笑んで、投げてあった鞘に剣を納める。

正直、たった数回稽古をつけただけなのに、鶴の上達振りは凄まじい。

本人は気付いているのか謎だが、たまに怖い位良い反応を示してくる。

兄に倣い鶴も剣を納めると、芝生の上に腰を下ろす。

天界は美しい。幾世紀経とうと、碧い空に豊かな大地が広がり、神々も決して老いることなく美しい姿のままだ。天帝下の闘神たちの守護もあり、争いも無いに等しい。時折彼らが邪の神を討伐することもあるが、失敗は無い。直ぐ片が付き、神々は討伐のこと等忘れてしまう。

「相変わらず人界に下りているのか？あちらの様子はどうか？」

「…此処数百年で落ち着くどころかますます酷くなっているよ。」

あの日、泣いている少女と出会った日。あの日のことは未だに誰にも話していない。

あの時彼は人間たちが、自分のことを恐ろしい存在だと認識しているという事実を知った。そして敬愛する兄と剣を交えて殺し合うという未来を描いた忌々しい絵のことも、あれ以来頭に焼き付いて離れなかった。

「ねえ、兄さん。僕たちで何か出来ることは無いのかな？」

自分が人間たちに恐れられていると知っても、鵜は相変わらず彼らを憂いていた。優越感を得たいがためだとか、偽善だとか、そんな感情からでは決してない。彼はただ純粹に、人間のために何かをしてやりたいと願っている。

「人間を襲っている魔物たちだけでも…何とか出来ないかな？天界の討伐軍では数が少なすぎるし、人間たちも人間同士の戦でそちらに手が回っていない状況だ。」

元より、神族は人界に関心が無い。天帝からの命でも無ければ、進んで人界に行くような闘神は滅多にいない。

「天帝陛下は…やはり人間のことにについてはお考えが及ばないのかな？」

月は頷く。

「…寧ろ人界が惨状にある方が、人間の信仰心は高まるからな。具体的に、何かを為さろうとは思っていないだろう。」

というより、頻繁に顔を合わせる月でさえ此処何百年か、天帝がまともに政務を行う姿をほとんど見ていない。天界が至って平穏ということもあるが、天帝はこと有る毎に月を代理に立て、公衆の目

の前に現れることさえ稀になってしまった。

「魔物を退治するために、神々がそう何度も下界に下りて行くのも……切りがないからな。」

鵜も月も、長い年月の間に気付いていた。人間たちを救うには、神々が出て行って何かをしてやったり、施してやったりする方法ではだめなのだ。あくまでも、自分たちの力で立てるようにさせなければ、その場限りとなってしまう。

そのようなことを話し合っていると、二人の会話を遮るものが現れた。

「陛下の天馬だ……！」

二人は空を見上げる。天高く、一頭の両翼を持った白い生き物が飛翔しているのが見えた。

「鵜、急いで戻れ。そのことについてはまた、考えてみよう。」

あの天馬は天帝の愛馬。天帝が帰って来たに違いない。

鵜が地上で月と剣の稽古をしていた、等と知られれば、厄介なことになるかねない。

「わかった。兄さん、ありがとう。」

「お帰りなさいませ、父上。」

鵜を帰した月は、たった今天馬から降りたばかりの父に頭を下げ、挨拶した。

神王は神女と共に天地開闢の折に生まれ出で、次いで天界の神々を創造し、天帝として君臨するようになったという、この世で最も古い神である。生きている年数は三万年とも五万年とも言われているが、その姿は壮年期を少し過ぎた頃といったところで、少しだけ白髪の混じった髪に豊かな口髭、顎鬚を蓄えていた。

「うむ。今帰った。」

その声で、月は父の機嫌が良くないことに気付く。遊びから帰って来た時はいつもこの様子だった。

「…母上が後程お会いになりたいと、仰っていました。」

天帝は溜息をつく。

「…なに、また長い説教でも聞かされるだけだろうよ。日暮れに参ると申しておけ。」

「承知しました。」

天馬を連れて行くよう下人に指示をした後、天帝は月に向き直った。

「ところで月、先程…お前は誰と話をしていた？」

やはり、鵜のことに気付いているようだった。

「誰…と仰いますと？」

「…まあ良い。心得ているとは思いますが、余りあれに良くするな…良いな？」

そう言い残すと、天帝は天宮へと入って行った。

数日後、いつものように夜明宮で書物に没頭していると、秘かに月が訪れて来た。

「兄さん！この間は大丈夫だった？」

鵜は月のことを案じていた。地上で自分と一緒にいた所為で、咎められていたのではないかと。

月は鵜を安心させるように穏やかな笑みを見せる。

「ああ、お前は何も心配するな。」

「でも…」

本当に、鵜は優しすぎる。自分のことよりも先に、まず他者のことを気に掛ける。

鵜に勧められ、月は傍にあった椅子に腰掛けた。

「この部屋は、年々書庫のようになっていくな。」

いつの間にか、天井まで届く程背が高く大きな本棚が置いてある。綺麗に整理され、様々な分野の本が並べられている。天界の記録、人界に出回っている神話、物語、軍記物、神術、剣術、哲学、史学、人間たちの医術…まだまだ有りそうだ。

元々鵜に書物を勧めたのは月で、彼も相当な読書家だった。しかし此処数百年は、天帝の政務を代わりに熟さなければならぬことこなが多く、書物を読む時間すら限られてしまっている。

「書庫から持ってきて、返さないと思って思っているんだけど…そのままにしまってるんだよね。他に読んでる人もいないみたいだし、いいやって。」

そう苦笑して自分も月の向かいに腰掛け、本棚の上の方まで見上げる。

「実は少し前耀蕎ようきょうが来てくれたときに、本が取りにくいだろうって本棚を用意してくれたんだ。」

耀蕎とは、天界の五大闘神の長として名高い女闘神で、神名をせい明神めいしんという。月の剣術指南役で、月と鶴への忠誠が厚く、鶴が月以外に心を許せる唯一の天界人だった。滅多に会うことは叶わなかったが、幼い頃から鶴は彼女を母のように、姉のように慕っていた。

「…そうか、では礼を言わなければな。」

「うん…！」

鶴の笑みに引き込まれて、月も嬉しくなる。

「ところで兄さん、この間の話だけど…」

「…ああ、今日はその件で来た。前々から…考えていたのだが、一つ案がある。」

月は一息ついて、胸の前で腕を組む。

「鶴、お前は人間を創造する術を心得ているか？」

思い掛けない質問に、鶴は驚く。

「え…？ うん、やったことないけど多分…出来ると思う。」

言い出した月さえも、実際に試したことは無い。限られた上位の神しか行えない高度な術で、天帝が人間を創造する時に使った外先例は無い。

「父上の戒律を守り、神が必要以上に人界に干渉しない方法で、人界の惨状を改善する…そのために、私たちの神力を与えた人間を創造し、人界を守らせる。」

「本当に…そんなことが出来るの？」

月が本気でそう提案しているのは、彼の真っ直ぐな眼差しが物語っている。しかし神が自らの神力を与えて人間を創るなど、前例が無く予想もし難かった。

「何人か…生まれつき神力が強い神人を選んで、宿を与えるとか…そういう方法は？」

『宿』とは人間が神によって与えられた、為すべき使命のことである。神々も宿を持つが、それは「理」ことわりというものによって定められる。例えば月や鶴が天帝神王の息子であることや、天帝が天帝として君臨しているといったことまでもを決めるのが理で、それはたとえ天帝であっても動かすことが出来ない。

「…今既に存在している人間ではいけない。生まれながらに『神』に仕え天命を全うする宿を持たせ、幼い頃より我らが導く。…人間を信用していないわけではないが、其処までしなければ…万が一ということも有り得る。」

月は言いたいのは、人間の本質のことだ。人は生まれた時は誰もが純粹であるが、生を歩むにつれ大なり小なり邪念を取り込んでいく。天よりの使命や神の力を与えても、それを必ずしも正しいことに使うとは限らない。ゆえに、生の途中からではなく最初から、間違った方向へ進まぬように導きが必要なのだ。

「確かに…その通りだね。人間より遥かに強いとされている神族だって、道を誤るんだから…」

「…ただ、この方法には欠点も有る。人界を良くしていくには、人間一人の一生分の時間では短すぎる。人間である以上、神族のように永遠の命を与えるとというわけにもいかないから…」

普通の人間はどんなに長くても百年程しか生きられない。そんな短い周期で人間を創造していくのは、月と鵜の神力の限界もあったし、人界への過剰な干渉と取られる可能性も拭えなかった。

「身体を不滅にすることは出来ないけど、人間を創造する過程でその魂を不滅にすることは出来るよ。そうすれば、ある程度の間隔で確実にまた転生を繰り返すように出来る。」

普通の人間は、死ねば魂が消滅するか転生するかのどちらかである。それは理によって支配される領域なので、月や鵜に制御することとは出来ない。しかし鵜の言う方法ならば、必ず転生するので創造は一度きりで良いということになる。

「そうか、それなら良い。しかし難しそうな手法だな…」

「いや、そうでもないよ。確か詠唱を少し変えれば良いはずだから。」

月は鵜が術に詳しいことに感心していた。伊達に書物を読み漁っ

ているわけではなさそうだ。

「…上手くいくか…不安だけど、兄さんが言うならきっと間違いないね。」

その言葉の通り、鵜は兄を信賴していた。此れまでの長い生において、月が間違ったことは一度として無かったからだ。

「では、私は父上の承諾を取りに行く。一応何をするにもお伺いを立てておいた方が良いでしょう。」

月はそう言って立ち上がる。

「でも…僕も一緒にやるって知られたら…反対されないかな？」

確かに、それは少々心許無い。それでも月は自信有り気に笑って見せる。鵜を安心させるために。

「心配するな、私に任せておけ。」

勝算はあった。このままでは、天帝を崇める人界の存在が危機となる。それを知れば、流石の天帝も何か手を打たねばなくなる。そして月の思惑通り、天帝は彼らの提案に渋々ながらも首を縦に振ることになるのだった。

約束の日の午後、鵜は夜明宮を出て『界の門』^{さかい}に向かった。黎明殿の一番西に位置し、地下からは人気のない道を通って行けるため、他の神に見られることはほとんど無い。

天界から人界に行くには、必ずこの界の門を通らなければならない。戻って来る際も同様である。ゆえに、黎明殿に入ることの出来る僅かな上位神のみが、下界と行き来することが出来た。しかし下界に神々が下りるのは普通邪神の討伐や魔物の討伐の命が下った時のみなので、滅多に使われることが無い。鵜が人界の様子を見に時折下りて行けるのもそのお陰だった。

鵜と月は界の門の前で落ち合うことになっていた。

門と言っても、実際に「門」があるわけではない。部屋の片隅に大きな穴が開いており、其処から下へと続く階段があるだけだ。その下が下界に繋がっている。

界の門の右手に少し離れた位置に、美しい水鏡が置いてある。その前に立つと、水鏡に下界の様子が映し出される。直接下りて行けない時は、其処から下の様子を窺い知ることも出来た。

鵜が着いた時、まだ兄の姿は見えなかった。政務が長引いているのだろう。同じ天子であるのにも関わらず、兄には恵まれた点が多かったが、天帝の代理として日々仕事を熟_じさなければならぬ点においては、ある意味鵜の方が楽だったのかもしれない。

少し経って、月がやって来た。

「鵜、待たせてすまない。」

「いや、そんなに待ってないよ。」

少しだけ息を荒くしている月を見て、鵠は嬉しくなった。仕事の後にも関わらず、急いで来てくれたのだ。

暫く話し合った後、創造する人間は二人と決めた。一人の人間に、性質が真逆の月と鵠の神力を注ぐのは危険を伴うためだ。光と闇の気を主とした人間を一人ずつ創ることにした。

また、性別は二人とも女に決めた。人間の場合、男よりも女の方が神気と調和し易い。そのため、人界でも神に仕えるのは「巫女」が多い。

「兄さん。」

術を行う前に、鵠は月に言っておかなければならないことがあった。

「実は…少しだけ不安なんだ。僕の力を使って、人間を創ることが…本当に良いことなのかどうか。」

「…何故だ？」

鵠は答えようとして、躊躇う。しかし、いつかは必ず言わねばならないことだった。

「僕は以前、人界に降りた時に見てしまったんだ。僕と…兄さんの『先見』を表した絵を。其処には…僕が“黒神”に為り…兄さんと戦っている姿が描かれていた。」

それを聞いた月の反応は、一瞬驚いた様子だったが鵠が思っていたよりも平静だった。…まるで、元よりその予言を知っていたかのように。

「お前はその先見を…信じているのか？」

鵠は頭を振る。

「でも…先見の予見は絶対だと言うし…天帝陛下や天妃陛下に疎まれているのは知っている。もし…もしもだけど、僕が本当に『悪』で『邪神』となる運命なら…そんな忌まわしい力で人間を創るなんて、しない方が良いのになって…」

俯き、徐々に声を小さくしていく鵠に、月が溜息をつく。そして右手を優しく、弟の頭に載せた。

「…お前は、父上や母上…そして私を…恨んだり憎んだりしているか？」

「まさか、絶対してないよ！」

大きく首を横に振って否定する鵠。

「確かに陛下に疎まれているのは…辛い。けど、憎しみや恨みなんでものは持ちたくないし、持つてはいけないものだ。」

その言葉に月は苦笑する。…本当に鵠らしい。生きている以上、持ち合わせて当然の負の感情を、彼は知らずにいる。それが良いことなのか悪いことなのかは判らないが、取り敢えず…予見の成就是程遠いものに思われた。

「…お前のように純粋な心の持ち主が、一体どうして『悪』になるというのだ？…心配し過ぎるな、全てはお前の心の持ちようだ。お前が今のままでいるのなら、何も案ずることは無い。」

月がそう言って、微笑む。兄の言葉に鵠は安堵する。

——心の持ちよう…か…

ならば、自分は信じていよう。決して先見の言う通りにはならない、あの絵の未来は訪れないと。自分はいつまでも兄を信じ、支え合っていること。

予定通り、術は行われた。新たに創生された二つの魂は、静かに人界へと下りて行った。

高く高く続いている、白い石の階段。手摺も無ければ、立ち止まって休む場所さえもない。周囲には何も見えず、ただ白い光の空間が続いているだけ。

…それは、『境の道』。地上と天上とを行き来するための、唯一の道だった。

神が人界や魔界に降りる為には、必ず此処を通らねばならない。天帝に逆らった神々は邪神と呼ばれ、この階段から地上に落とされ二度と戻ることは出来ない。

下界からの入り口には、天帝が遣わした霊獣が守護の任にあり、更にその重い扉は神格を持たねば決して開けることが出来ないのだ。

扉を開け、境の道を上り、天界への入り口である界の門を潜ることが出来る人間が、この世にたった二人だけ存在した。

その二人こそ、最高神である月と鵄がその神力を分け与えて創造した「神巫女」だった。

二人が出会ったのはほんの二年程前。月と鵄に命じられた魔物討伐が切っ掛けだった。

「奈雷、貴女は先の聖安との戦に出られたそうですね。それで：
岐の国情は如何です？」

白い階段を上りながら、親しげに問い掛けたのは琉羅という女だった。

黒い髪に深紫色の瞳を持ち、その身形からは高貴な生まれと見て取れる。

彼女は鵠が創造した神巫女で、人界は茗帝国の皇女だった。皇帝である兄を助けながら、優れた軍略と武の力で時に自ら兵を率い、戦乱の続く人界平定に力を尽くしている。

「先の戦は、我が祥岐が優勢のうちに和議を結ぶ形で終わった。しかし：戦場となった祥岐の荒れ様は凄まじい。土地を失った者や飢えに苦しむ者で溢れている。：復興までには暫く掛かるだろう。」

奈雷、と呼ばれた女は月が創造したもう一人の神巫女で、蒼い髪に深紫の瞳を持つ。こちらは祥岐という国の貧しい生まれで、早くに両親を亡くし、その生い立ちから辛い少女時代を過ごしてきた。やがてその並外れた神力や武術の才で以て、^{もっ}国の魔物討伐軍に参加するようになる。そして武功を立て、遂には皇帝に軍の要職を任される程にまでなった。

容姿においては、二人とも似たような造りの顔貌^{かおかたち}をしており近い麗質を持ち合わせ、その美貌は人界でも評判が高い。

しかし一方で、性格の方は似ても似付かないものだった。穏やかで誰に対しても優しく接する琉羅と、その過酷な生い立ちから、自分に厳しく他人を余り信じず、感情を表に出さない奈雷。まるで性質の違う二人だったが、光と闇という反対の神気を纏うこともあって、お互い相手が持つ自分に無いものを補い合う形で、惹かれ合っていた。

「私たちは同じ宿命を持ちながら、会えるのは戦場か：こうして天界に罷り越す時^{まか}だけですものね：」

住んでいる国が違うということもあって、普段二人は頻繁に会うことは無い。奈雷の方が国中を行ったり来たりしていることもあり、文を交わしたりもしない。

それでも、「天に代わって邪悪を討ち、人界に平穏を齎す」という宿を背負ったたった二人だけの神巫女として、彼女たちの心の繋がりが、友情はとても深いものだった。

> i 3 9 0 9 2 — 4 8 4 8 <

― 4 ― (後書き)

ついに奈雷と琉羅登場。

それぞれ奈雷は麗蘭の前世（500年毎転生なので、間にあと2人います）、琉羅は瑠璃の前世です。

「久し振り、琉羅。」

「お久し振りにございます。」

頭を下げ丁寧にあやがる琉羅に、鵜は席を勧める。

「確か：二年振り位かな？ 君はまた：美しくなったね。」

「ありがとうございます。」

お互い、久し振りに会えたことを喜び微笑み合う。

鵜は琉羅のことを、彼女が幼い少女の頃から見守ってきた。彼女は自分と月が創造し、使命を与えて人界に下したことを伝え、必要な時は導いてきた。

時が流れるのは速く、いつの間にか琉羅は鵜の外見の年齢と同じ位にまで成長している。そのことが何とも不思議で、何となく嬉しくもあった。

「実は此処何年かで：色々事情が変わってね。以前のように簡単に人界に降りることが叶わなくなってしまったんだ。界の門にある水鏡で、時々様子を見ているんだけど：」

三年程前、ある事件が起こった。天帝が女神新羅女しんらによと不義の子を成していたことが明らかとなったのだ。

その息子の名は「翠」すい。その存在は五十年もの間隠されていたが、とある切っ掛けで、天妃の知るところとなってしまった。

怒り狂った天妃は、まだ少年の姿をしていた翠の目の前で、新羅

女を残酷な方法で殺した。翠は憎しみに駆られ、天妃に一矢報いようとするが叶わず、捕らえられそうになった。

その時天宮の地下まで逃げて来た彼を鵜が救い、月が義弟の助命を嘆願したこともあり、翠は天帝に神格を奪われ下界へと堕とされることになったのだった。

その一件以来、天帝と天妃の関係が悪化したのは言うまでもない。神王は腹癒^{はらい}せに神々の規律を強めた。鵜の行動を監視し、更に自由を制限し始めたのもその一つだ。

「君や奈雷のお陰で、人界では確実に戦が減ってきたし…魔物の類の心配も無くなりつつある。…本当に、感謝しているよ。」

屈託なく笑う彼に、思わず琉羅も釣られて笑んでしまう。こうして近くで話していると、彼が自分の創造主で、神族…それも最高神の位にあるということを忘れてしまいそうになる。

「此れも殿下や聖龍神殿下のお導きのお陰です。私の方こそ感謝してもしきれません。」

鵜たち二人の天子は、天帝の戒律に背くか背かないかのぎりぎりの線を渡ってまで、人界の荒廃を食い止めようとしている。

鵜が人界を憂う理由を、かつて聞いたことがある。すると彼は、ただ人間が好きなのだと答えた。好きだからこそ、人々が不幸になってゆく様子を見たくないのだと、そう言っていた。あの時の彼の澄んだ瞳に惹きつけられ、琉羅は自分の身を、鵜の願いのために捧げると自らに誓ったのだった。

「…僕に感謝する必要なんて…全然無いよ…君たちには無理やり重い宿命を負わせた上に、とくに君は…僕の実在の所為でもっと苦勞をかけているんだから…」

彼女たちを創造する前は、考えもしなかった。「人界を守るため、何度も転生し使命を全うする。」という宿を与えるということは、本人たちの意思には依らず、戦いの運命を歩ませるということなのだ。

闘い続けることで生まれる悲しみや苦しみ、普通の人間とは違う力を持つという葛藤。彼女たちがそうした困難に立ち向かいながら成長していく姿を見て、罪悪感が募っていく。

加えて、自分は天帝から人間からも疎まれた黒神である。月の神巫女である奈雷とは違い、自分の神巫女として生まれた琉羅は、きっと不自由を感じることもあるだろう。

鶴の言葉を聞いて、琉羅は少し驚いた顔をする。そして直ぐにまた、優しく微笑む。なんだそんなことか、といった具合に。

「殿下、私は自分の宿を辛いと思ったことは何度かありますが…疎ましいと思ったり、ましてや貴方をお恨み申し上げたりしたことは全くございません。むしろ…感謝している位なのです。」

これは、彼女の本当の気持ちだ。

「この宿とこの力を持っているからこそ、得られるものもたくさんあります。…大なり小なり違いはあれど、一人の人として生きることはそういうことなのだと思います。」

自分には自分にしか出来ないことがある。自分が今其処に存在していることに感謝して、与えられた命を生き抜くだけだ。彼女は常日頃から、そう心掛けて生きている。

「…君は強いんだね…琉羅。僕も…見習わなくてはね。」

心配しなくても、琉羅たちは大丈夫なのかもしれない。鵜はこの時そう感じた。運命から逃げずに、立ち向かう。その強さを自分も持ちたいと、心底から感じたのだった。

「：こんなことを申し上げては恐れ多いのですが：貴方様は十分お強いですわ、殿下。きっと誰よりも優しく：美しいお心をお持ちです。」

琉羅にそう言われ、鵜はほんの少しだけ顔を赤らめる。その様子がまた、彼女には微笑ましく思えた。

——本当に、何故なのだろう？

黒龍神殿下は人界を憂い人間を憂い、あらゆるものを愛している慈悲深いお方。

その彼が何故、「黒神」であり「忌むべき天子」なのだろう？

会ったこともない天帝のことは良く分からなかったが、彼女にはその点が、どうしても解せなかった。

「そういえば、今日は奈雷も来ているんでしょう？」

何となく気恥かしくて、鵜は話題を変えようと努めていた。

「はい、共に参りました。殿下は彼女とお会いになったことは無いのでしたね？」

確か以前、琉羅の方は月に会ったと言っていた。しかし鵜は未だ、奈雷と会ったことが無い。常々会ってみたいとは思っていても、なかなか機会が無かったのだ。

「彼女は私が今まで見てきた中で最も美しく、最も強い：素晴らしい友人です。自信を持って言えますわ。」

話が終わると、夜明宮を出て階段を上り地上に出た所まで、鶴は琉羅を送って行った。彼女を見送り再び地下へ降りようとすると、兄が彼を呼び止めた。

「琉羅を送りに来たのか。」

「うん、奈雷の方は帰ったの？」

月は頭を振る。

「いや、実はお前に会わせようと思って連れてきたのだ。次にいつ機会が有るとも知れぬからな。」

そう言って、少し離れた柱の陰に控えていた人影に手招きをする。すると、蒼く長い髪の女が現れた。

——奈：雷：？

こんな経験は初めてだった。彼女が近づくにつれ、鶴は自分の胸

が高鳴るのを感じる。

鵒の前まで来ると、奈雷は地に膝を付けた。

「奈雷、此れは私の双子の弟、鵒だ。…顔貌が同じだから判りやすいがな。」

いつもに増して何処か楽しそうな月も珍しかったが、そんなことは鵒の頭には入らなかった。この目の前にいる人間の女に、すっかり目を奪われていたから。

「お初にお目に掛かります、奈雷と申します。」

彼女は頭を下げ、余り抑揚の無い声で言う。

鵒は挨拶を返すのも忘れて、彼女の麗姿に見入っていた。まるで白い光に身を包み込んだような、輝くばかりに玲瓏な姿。その美しさは筆舌に尽くし難く、ただただ鵒の心を魅了する。

「どうした？鵒。」

鵒を不思議そうに見ている兄の言葉に、はっと我に返る。

「あ…は、初めまして、奈雷。会えて…嬉しいよ。」

出来るだけ平静を装うが、鵒は焦っていた。此れまで感じたことの無い程の胸の高まりが、目の前の二人に気付かれていないかどうか、とても不安だった。

——この気持ちは一体…何なんだろう？

恋も愛も知らぬこの時の彼には、未だ知る由もなかった。

― 5 ― (後書き)

出会うべくして出会ってしまった、鵠と奈雷。

次回、新章突入で話が動きます。

— 1 —
(前書き)

役者が揃い、いよいよ動きます。

鵜と奈雷の出会いから、早くも一年程が過ぎた。

ある日、鵜は久し振りに天帝直々の呼び出しを受けた。彼の記憶が正しければ、最後に天帝の姿を見てから五百年は経過している。確か黎明殿で行われた何かの式典の折に、鵜が天帝の玉座の下で控えていた際、天帝は儀礼的に一言だけ声を掛けた。

それでもまだ良い方で、母である神女との関係は更に冷え切っていた。彼女とはまともに話したことが全く無く、声を掛けられたことすら無い。まだ幼い頃、母の姿を見られることがまだ嬉しかったあの時、少し目が合ってしまっただけで、神女の表情はまるで化け物か何かを見たような怯えた顔になり、直ぐに視線を逸らされてしまった。

その時のことが切っ掛けで、鵜は極力、神女に会っても目を合わせないように軽く会釈するだけにしている。母の反応を見て悲しくなったことも理由の一つだが、何より出来る限り母を不快にさせたくは無かったのだ。幼い頃はそんな母の反応に少なからず傷付いたものだったが、何千年も経つうちにいつの間にか、仕方が無いことだと割り切れるようになった。

約五百年振りに、鵜は黎明殿の玉座の間に赴いた。

入ると正面に長い階段が高く続いており、その先に天帝の玉座がある。下から見上げると、玉座の天帝の表情がなんとか判る程度の位置に離れていた。

階段の下には天界中の上位神が集まることの出来る空間が広がっており、鵜がやって来た頃には既に、広間を埋め尽くす程の神々が集っていた。久し振りに鵜が天帝に呼び出されたということもあった。

て、物珍しく集まって来たのだろう。

階段の下で、鵄は天帝がやって来るのを待つ。久々に鵄の姿を目にする神々が、口々に彼のことにについて噂し合っているのが耳に入ってくる。

鵄がこの天宮に来たばかりの頃、彼らは憚ることなく本人にも聞き取れる位置で、鵄のことを口々に悪く言った。それは悪意に満ちていて、幼かった彼には耐え抜くのがやっとのものだった。それが、鵄が成長するにつれて形を変えていき、今度は鵄に対する畏怖に変わっていった。以前のように露骨な言葉は使われなくなったものの、鵄だけをこの天界で異質のものとして見る姿勢は何ら変わっていなかった。

「黒龍神殿下の御姿を見るのは久方振りだな。あの方が天帝の御前に呼ばれる等、今宵はどのような用向きがあつてのことだろう？」
「何でも聖龍神殿下も召されているとのことらしい。態々（わざわざ）…我々の前で伝える必要がある用とは、一体何なのだろう？」

彼らの言う通りで、鵄にもそれが解せなかった。神々が集まる玉座の間にこうして呼び付けずとも、他にも方法が在ったはずだ。天帝の用事とは、周知にしておかなければならないことのようなのだ。

「鵄。」

月が早足で入って来た。神々は口を閉じ彼に頭を下げて挨拶する。あくまで儀礼的だった鵄へのものとは明らかに様子が違っていた。

「兄さん、君も呼ばれていたんだね。」

「ああ。我々が揃って呼ばれる等…面倒なことではなければ良いが…」

月には多少の心当たりが在った。そして鵠も呼ばれていることを知り、それが確信へと近づいていた。

「天帝陛下、並びに天妃陛下の御出座しにございます。」

鵠たちは玉座の方を向き、地に片膝を付けて頭を下げる。周囲の神々もそれに倣い立礼する。

玉座の裏側から、天帝が天妃を伴って現れる。天帝は階下の月と鵠を一瞥すると玉座に着き、天妃も傍らに控えた。

「月、鵠、面を上げよ。」

多くの神々が静まり返る中、ただただ天帝の重く深みのある声だけが響き渡る。双神は顔を上げて父母の姿を見た。

鵠が五百余年振りに見た天帝と天妃の姿は、あの頃とほとんど変わらない。天帝の鵠を見る陰険な目つきや、目すら合わせようとしてない余所余所ホソホソしい天妃の態度も、同じだった。

「そなた等を今宵、召したのは他でもない。五大竜王を殲滅せしめる為である。」

天帝のこの言葉に、神々が驚き動揺し始めた。そしてそれは鵠も同様で、月だけが予想通り、という反応を示していた。

「此処数年、奴らが人界魔界問わず下界を騒がせ暴れ回っているのは皆知っておろう？」

五大竜王とは、元来神王が下界を守護させる目的で創造した「龍」である。木火金土水の五行元素をそれぞれが司り、その力は天界の闘神にも匹敵すると言われている。しかしその創造過程において失

敗し、ただ破壊と殺戮を好み、世を脅かし神々の手を焼く悪しき存在と為り果てたのだった。

「月と鵄、お前たちに彼奴らの討伐を命ずる。『龍神』としての力を存分に見せるがいい。」

右手を上げ、月の方を示す。

「月、お前には水龍の討伐を命ずる。」
「…御意。」

月は当然のように頷く。天帝の手が鵄の方へと向かう。

「…鵄、お前には…土龍の討伐を命ずる。」
「…!?!?」

一瞬、鵄は自分の耳を疑った。鵄だけでなく、横にいた月や頭を下げたまま立っている神々も同様だ。

「土龍と言えば、五大竜王の中でも抜きん出た魔力を持つ、最も邪悪な龍。此れを斃せばお前の『天子』としての名も上がるというものだ。心して行くが良い。」

そう言った天帝は、確かに笑んでいた。傍らの天妃までもがそうだった。

天宮の地下に長い間置かれた鵄は、月や闘神たちのようにまともに戦ったことが無い。同じ天子といえど、その神力は月の方が格段に優れている。にも関わらず、今の鵄には手に余る土龍の討伐を月ではなく鵄に命ずるということは、たった一つのことを意味していた。

——天帝は、僕を殺そうとしている…？

「…鵠、どうした？ 予の命を受けてくれぬのか？」

冷たい言葉で、鵠は我に返る。受けてくれるも何も、天帝の命に逆らうことなど許されない。

「謹んでお受けします。」

そう答えた鵠に満足そうな顔を見ると、天帝は続ける。

「残りの木火金の龍たちは、お前たちが創造した『神巫女』という人間たちと、『翠』に任せることにした。」

この言葉に、更に辺りがざわめく。この天界において『翠』の名は、既に禁忌と為っていたからだ。天妃の表情が僅かの間凍りついたが、直ぐに元に戻っていた。

「お言葉ですが、陛下。」

反射的に、言い放っていた。

「何だ鵠。」

「幾ら神力を与えているとはいえ、彼女らは人間です。竜王と戦わせるのは、危険が大き過ぎるではありませんか？」

天帝は邪悪に微笑むと、鵠を制して言う。

「…結構な物言いだな。だがこんな時の為にこそ、お前たちは人間

を創造したのではないか？…人間の心配をするより、先ずは自分の心配をしたらどうなのだ？」

まるで嘲笑うかのような言葉だった。鵠も、そして月や他の神々も確信する。天帝がこの機に鵠を葬ろうとしていることを。鵠は唇を噛んだ。

「『翠』は追放された身、『神巫女』たちは人間。この神々の集う場に召すわけにはいかぬ。人間たちにはお前たちが直接命を下すように。そして来る戦いに十分備えておけ、良いな？」

それ以降は無言を言わさぬ態度で、天帝はその場を締め括った。

— 1 — (後書き)

このお話は「荒国に蘭」と同じく中学2年生の時に書いたものをリメイクしており、キャラ名はほぼそのままなのですが、ネーミングセンスがなさすぎですね…

火龍とか木龍とかって…

まあ面白いので、そのままです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5325ba/>

黒邪の啼哭（聖安戦記 外伝）

2012年1月15日01時45分発行